進路指導最前線

教師はなにをめざし、どう動いたのか？

❷ 体系的な進路指導

3年間の進路指導を系統立てる

愛知県立
豊田南高校

生徒主体で職業から大学までを調べさせる

豊田南高校の取り組み

1

- **進路観を系統立てて育成**
  1年次で職業、学部・学科について考え、2年次で大学と入試について研究するという、進路の流れを重視した系統立った指導を実施した。生徒の目的意識を徐々に高めながら志望校選択へと導いていった。

2

- **計画立案は生徒主体**
  研究テーマの設定は生徒の主体性を高めることをねらい、生徒たちに立案させた。系統立てた進路指導の取り組みを反映して、生徒はそれまでの研究結果からさらに知りたいと感じたことを次回のテーマとするようになった。

3

- **グループ研究で相互に刺激を与える**
  2年次の大学研究では生徒の志望学部系統ごとに、クラスの枠組みを越えてグループを編成。同じ志望の生徒同士で研究することで仲間意識やライバル心を生み出すことができた。

愛知県立豊田南高校

昭和55年創立。今年で創立20周年を迎える。11年度の生徒数は1113人。主な進学先は名古屋大、名古屋工大、同志社大、立命館大、南山大、愛知大など。勉学だけでなく部活動にも力を入れている。カヌー部、ビームライフル部は毎年インターハイ、国体に出場。

「進路について知りたいことを、自分たちで調べて発表しよう」

昨年の10月30日、1年次の第2回進路LT（LHR）のために、各クラスの正副室長および進路委員を集めた「進路LT準備委員会」の席で、学年の進路指導担当の小島栄治先生はいった。

「委員のきみたちが中心になって、この1週間でクラスの意見を集約し、自分たちのクラスではなにをテーマに研究するのかを決めてほしい。そして、テーマについて調べたことを冊子にして、来年1月30日の進路LTのときにそれぞれのクラスで発表してもらいます」

「先生！」。質問の手が挙がる。

「テーマが決まったらどうやって調べるんですか？　クラスで班ごとに調べるんだったら、どんなふうに班を分けたらいいですか？」

「どんなふうに班分けして、どんなふうに調べて発表するのかも自分たちで決めるんだよ。11月21日までに計画書を提出してください」

小島先生は笑って答える。

豊田南高校では、これまでも職業研究や学部・学科研究を行ってきた。しかし、年度、クラスによって内容、到達度にはバラつきがあり、それぞれの取り組みはややもすると単発の行事になっていた。職業研究での成果を学部・学科研究につなげていこうという思いは、教師にも生徒にもしっかり根づいていたとはいえなかった。

「せっかくの進路研究も、やりっ放しになっては効果がありません。3年生になって満足のいく受験校選びができるようになるためには、職業や学部・学科に対する興味・関心を、順序立てて考え、志望校へとつなげていく必要があります」と進路指導主事の都築春彦先生は語る。

同校は平成9年度より、学年ぐるみの2年間に渡る進路指導の取り組みを開始した。まず1年生で職業への興味の幅を広げ、さらにその結果を踏まえて学部・学科を研究し、2年生での具体的な大学研究、入試研究へとつなげていく。

進路資料室の資料を利用しながら、自分の力で調べ、考える生徒たち。進路LTでは生徒が自主的に進路研究に取り組んでいった。

将来の職業について考えた第1回進路LTが行われたのは10月3日のこと。まだ生徒の記憶に新しいはずだ。とすれば、生徒の興味は具体的にどんな学部・学科へ進めばなりたい職業に就けるのか、ということに向いているはず……。それが都築先生の考えだ。だが、1年生の生徒に任せて、どれくらい充実した進路LTができるのか、小島先生は内心不安でしかたがなかった。本当にうまくいくのだろうか。小島先生は第1回進路LTのことを振り返りながら考えた。

第1回目の

進路LTの準備は夏休み前から始まっていた。

愛知県立豊田南高校教諭
都築春彦 Tsuzuki Haruhiko
昭和27年愛知県生まれ。国語科担当。同校に赴任して10年目。進路指導主事として進路LTの確立をめざす。

愛知県立豊田南高校教諭
小島栄治 Kojima Eiji
昭和41年愛知県生まれ。数学科担当。同校は赴任10年目。1年生担任。学年進路指導部。進路関係のこととなるとつい仕事を抱え込みすぎるのが悩み。

愛知県立豊田南高校教諭
塩屋雄一 Shioya Yuichi
昭和44年愛知県生まれ。物理担当。同校は赴任6年目。3年生担任。学年進路指導部。「少しでも多くの大学の情報を生徒の目に触れさせたい」

7月の保護者会で各クラスの担任が、保護者に職業に関するアンケートへの協力を依頼した。小島先生も自分のクラスの保護者に訴えた。

「生徒たちに、最も身近な社会人であるお父さん、お母さんの職業観を知ってもらうことで、職業を身近に感じてほしい。そしてそこから地に足がついた進路選択をしていってほしいと思っています。どうかよろしくお願いします」

1学期の終業式の日が締め切りだったが、学年360人のうち、100人分も集まれば成功だろうと考えていた。ところが、いざふたを開けてみると8割近い回収率。進路指導部の教師はうれしい悲鳴を上げた。

小島先生は、学年全部の保護者からのアンケートに加え、自分のクラスの生徒に調べさせた地域の社会人へのアンケートの回答のワープロ打ちに、夏休みのほとんどをつぶした。「仕事の内容」「職業を決めた理由」「仕事のやりがいやつらさ」「必要な資格」など、率直に書かれた大人からのメッセージを、ぜひ学年すべての生徒に見てもらいたい。その一心で作業に没頭した。

「進路情報誌などから得る表面的な知識だけではなく、最も身近な大人の生の声を聞くことで、実感として職業観を持ってもらうのが、第1回進路LTの目的なんです」（都築先生）

アンケート集計をまとめた資料は生徒にも大好評で、それぞれ自分なりに親の思いを受けとめ、自分はどんな職業に就きたいのか、そのためにはどんな資格がいるのか、など具体的に進路を考えるきっかけになったようだった。

第2回 進路LTの計画書の提出締切日、

小島先生はホッと胸をなで下ろした。テーマは「職業と学部・学科の関係」「理系から就く職業と文系から就く職業」「似た学部・学科の比較」など。生徒から持ち寄られたテーマの多くは第1回の進路LTが反映され、しかも都築先生が予想したとおり、学部・学科についての研究にリンクしていた。

だが、すべてがうまくいったわけではない。あるクラスでは「大学のしくみ」「大学と職業のつながり」「国公立大と私立大の違い」「資格ってなに?」「文系・理系大学の違うところ」など、七つのテーマをそれぞれ班単位に分けて調べた。しかし「発表が50分の進路LT内でうまくまとまらなかった」「発表に慣れていないため、せっかくいい内容なのにうまくほかの生徒に伝わらなかった」「司会役が時間を見計らってLTを進行させることができなかった」など、問題点や反省点が生徒や教師の間から出てきた。

「改善すべき点はあります。しかし、生徒が主体的に進路に関係することを調べる、その行為そのものに意味があるのです。調べ方がわかっただけでも、この進路LTには価値があるし、次につながっていくはずです」（都築先生）

1年生 が第2回進路LTで発表を行っている同じ日の同じ時間、2年生の

担任の塩屋雄一先生はクラスの生徒に「受験シミュレーションレポート」を書かせていた。

豊田南高校では2年次でも引き続き、進路LTが行われる。第1回は10月3日。夏休みの課題として関心のある大学に見学に行かせ、レポートを提出させる。そのうえで、クラスの枠を取り払い、文学・人文系、外国語系、教育系、理学系、農学系、工学系、情報系など、学年を11の志望別グループに分け、それぞれのグループでさらに班別に数校の大学について調査し、レポートを作成、発表する。将来の夢が同じだったり、動機は違うが同じ大学や学部をめざす生徒がグループを組むことで、仲間意識やライバル心が生まれたようだ。

物理の担当である塩屋先生はこのとき、工学系のグループを担当した。自分自身の大学時代の経験を、少しでも生徒の参考になればと話して聞かせた。

「多くの生徒にとって、知っている大学は県内の大学と関東や関西の有名な大学に限られていました。2年生の第1回進路LTでは、やりたいことをきちんとできる大学はほかにもたくさんあることを生徒に教えたつもりです」

2年次第2回の進路LTでは、チャレンジ校、ボーダー校、セーフティー校の三つのグループ別に受験したい大学を選ばせ、それぞれの入試科目と配点、入試日程、合格発表日、手続き締切日などを「受験シミュレーションレポート」に書かせ、大学受験を具体的にイメージさせる。一生懸命に表を埋めている生徒を見ていると、これまで、進路LTを通して生徒に伝えてきたことが、ちゃんと生徒の中に生きているのかもしれないと塩屋先生は思う。

豊田南高校が

1年次から系統立った進路LTを始めて、今年で3年目。10年度の反省を基に、今年度は進路LTを75分間に延長して発表時間を確保したり、生徒に事前に書かせたり調べさせる時間もきちんととることにした。今後も少しずつ改善していきたいと進路指導部は知恵を絞る。

ところで、生徒たちは進路LTをどう受けとめているのだろうか。

「小さいころからずっと警察官になりたいと思っていましたが、進路LTをやって、ほかの職業もいいなと思うようになって迷っています」（2年生・男子）

「地雷撤去の機械を作る技術者になるため、機械工学科か電子工学科に行こうと思いました。それにはもっと勉強しないと」（3年生・男子）

「英語学科を志望していたんですが、インテリア関係をやりたくなって家政学科に変えました。進路LTのときとは違う方向になったけど、自分のやりたい方向に進むにはどうしたらいいか、自分で調べることができました」（3年生・女子）

志望をより強固にした者もいれば、新たな志望に方向転換した者もいる。だが、それでいいと都築先生はいう。

「人生は選択の積み重ねです。そのシミュレーションとして進路LTがあります。高校生にはさまざまな選択のシーンがあるのですから、変更があって当たり前なんです」

人生は選択の繰り返しだから、その選択肢を多くするために、生徒の視野を広げてやりたい。そして、その選択肢の中から自分に合った道を自分自身で絞り込んでいく力を生徒につけさせたい。系統立てられた進路LTは、確かに生徒たちに大きな影響を与えているようだ、と豊田南高校の教師たちは手ごたえを感じとっている。

コミュニケーションの中で、生徒の進路観を探る。学校ぐるみの行事が確立する一方で、担任個々の個別指導に、より力を入れている。

体系的な進路研究の目標は考え、調べる方法を学び、今後の人生に生かしていくこと。進路LTの意義を生徒に何度も語りかける。

進路LTの流れ

1年次	第1回	職業についての基礎知識を身につけ、自らの職業観・勤労観について考える
	第2回	生徒自身が計画・立案し、進路を考えるうえで生じた疑問について調べていく※
2年次	第1回	大学に関する資料の使い方を学びながら、志望校の情報を収集し、知識を深める※
	第2回	入試の概要を知ってシミュレーションすることで、知識を深め、自分がなすべきことを知る

※印の進路LTの当日は発表のみ。生徒は放課後などを利用して、事前準備を行う。

❷ 体系的な進路指導

福岡県立
小倉高校
既存の行事を見直して、進路指導の新たな流れを作る

福岡県立小倉高校

明治41年創立。11年度の生徒数は、1203人。進学先は全国の大学に及んでおり、11年度入試での現役合格者数は、東京大7名、京都大4名、九州大56名、早稲田大11名、慶応大7名となっている。部活動も活発で、サッカー部の8年度九州大会準優勝をはじめ、野球部、テニス部、吹奏楽部なども高い実績を残している。

小倉高校の取り組み

1

●既存の行事を進路指導の視点で再構成
勉強だけ、部活動だけでなく、総合的な力を持った生徒を育てるため、学校行事に進路指導という一本の筋を通した。その際、行事を新たに作り出すのではなく、既存の行事を進路指導という視点から再構成した。

2

●段階的に進路に対する考えを深めさせていく
進路の情報を得るためには、まず、なにをどのように調べればいいのか、調べる方法を学ぶ。それから、興味ある職業や学問、大学について調べ、実際に職場や大学に足を運ぶ中で、自分の進路を徐々に固めていく。

3

●日ごろから生徒に動機づけを行う
どんな取り組みを行うにも、生徒にやる気がなければうまくいかない。次々とほめることで、生徒にやる気を起こさせ行動するようにしむけていく。そのため、日ごろから、教師間で生徒についての情報交換と、生徒理解が必要になる。

「すべてを新しく作り出すのではなく、既存の行事を見つめ直して進路指導の流れを作ったのが、『倉高ONLY ONE計画』です」

9年度から小倉高校で始まった「倉高ONLY ONE計画」について語るのは、教務主任の満江寛俊先生。それまで単発的に行われていた行事に、進路指導の観点から3年間で自分の希望進路を実現するという一つの方向性を持たせたのが、この「倉高ONLY ONE計画」。名前には、生徒が3年間で自分の進路を見つけ、それを実現し、その過程の中で「かけがえのないONLY ONE」の存在に育ってほしいとの思いが込められている。

小倉高校では、授業や部活動、文化祭などの行事といった取り組みが、それぞれ確かな成果を生み出していた。しかし、満江先生は、それだけではなにかが足りないと感じていたという。そこで、進路を考えるという一つの目的を持って行事に取り組む中で、総合的な力を持ったたくましい生徒を育てていこうと始まったのが、「倉高ONLY ONE計画」だった。

「それまでは、文化祭なら文化祭という行事を、生徒と教師が一丸となって実行し大成功してみんなで涙を流す、というところで完結していました。それだけでも十分すぎるほど素晴らしいのですが、すべてを3か年というスパンで考えさせるため、1年次の文化祭で進路を意識させ、次に職場訪問で進路の調べ方を知る、というように、各行事に進路指導的意味合いを加え、つながりを持たせたんです」（満江先生）

「倉高ONLY ONE計画」は、5月末に行われる文化祭から既に始まっている。1年生は、2クラス合同で一つのテーマについて調べ、その結果を展示で発表することになっている。ここまでは、従来から行われていた文化祭と同じ。変わったのは、「進路に関係する」「自分たちの将来にかかわる」という方向性をテーマに与えたことだ。

その結果、環境や医療など、社会全体の問題や、2年次の修学旅行で行くニュージーランドについてなどが、テーマになることが多くなったと話すのは、進路指導部の井上哲秀先生。

「生徒同士が話し合ってテーマを決めますが、集団での取り組みなので、生徒個人の進路の絞り込みが目的ではありません。進路についてこれから考えていくうえで、こうやって調べるんだと、まず体験するという意味合いが強いです」

9年度1年生を担任した池田好夫先生も、文化祭を進路に関する情報を得る場とは、とらえていないと話す。

「研究テーマが環境なら、環境問題の現状、今後の課題などを調べることになるでしょう。その中で、手に入れたい情報を得るためにはどうしたらいいのか、調べ方を学んでもらえればいいと思います。生徒は初め、なにをどう調べればいいのかわかりません。ですから最初は、

「倉高 ONLY ONE 計画」スケジュール（平成11年度）

1年生	5月末 文化祭／クラス発表 7～8月 職場調査（職場訪問） 10月 弁論大会 2月 小論文指導
2年生	5月末 文化祭／ビデオ制作 7～8月 大学調査（大学訪問） 10月 学部別講演会 12月 ニュージーランドへの修学旅行
3年生	5月末 文化祭／クラス劇 9月以降 面接・小論文指導

福岡県立小倉高校教諭
満江寛俊 Misue Hirotoshi
国語科担当。学年主任を5年間勤め、その後、教務主任に。今年で2年目。昔から受け継がれてきた「真の倉高生」をこれからも育てていきたい。

福岡県立小倉高校教諭
井上哲秀 Inoue Tetsuhide
担当教科は物理。進路指導部に所属して6年目。「授業、行事、部活動を通して、さまざまな人間性の発揮を生徒に期待したい」。

福岡県立小倉高校教諭
池田好夫 Ikeda Yoshio
担当教科は化学。現在は、3年生の担任。生徒には、調べることより、実際に現場で感じ、考えたことを大切にして欲しいと伝えている。

福岡県立小倉高校教諭
松本英 Matsumoto Ei
地歴公民科の地理担当。現在は3年生を担任する。生徒会の指導を担当。「生徒の近くにいて、それでいてあまり口出ししない、というのが理想ですね。」

図書館や進路指導室で本を探してごらんなどと、教師が助言を与えます。そうやってあるテーマについて調べておけば、今後に進路を決定するときも、調べ方がわかるはずです」

文化祭は、ほかの学年にとってもそれぞれの手法で進路に関する研究を深める場である。3年生は劇、2年生はビデオ制作で、それまでに調べてきたことや訴えたいことを表現している。

既存の行事で

基本的に構成されている「倉高ONLY ONE計画」だが、9年度より新しく始まった取り組みもある。それが、1年次に行われる職場訪問。従来の行事には、企業とはどんなところか、職業とはなにか、を肌で感じられる行事がなかったので、その足りない部分を補うために、職場訪問を新たに始めることとなった。

文化祭で学んだ調べ方で生徒は事前に調査を行い、疑問点を整理してから職場を訪問することになる。訪問先に関係し、かつ自分の興味ある事柄について、企業のパンフレットや関連分野について書かれた本を読み、まとめるといった作業を行う中で、生徒は自分の知りたい情報を手に入れる方法を身につけていく。

「主眼を置いているのは、調べた内容自体ではなく、調べ方を知ること。文化祭で身につけた調べ方を、職場体験の事前調査などで、自分のものにしてほしいですね」（池田先生）

また、始まった当初は、資源・エネルギー、環境・バイオ、情報など、かなり細かいコースを設定し、コースごとに決められた職場を訪問した。だが、11年度は、生徒が希望に応じて訪問先の職場を選ぶ形とし、コース分けは2年次から、しかも大まかに分けるだけにした。

「9、10年度は、職場訪問のあとコースを変わりたいという生徒がかなり出たんです。それなら、早くから細かくコースを分けない方がいいだろうと判断しました。そこで、11年度は2年生になってから、医療系、理工系、文系の大きく3つのコースに分けるだけに変更しました。早いうちから進路を絞ることは重要ではありません。それより試行錯誤して、最適の進路を見つけ出してほしいと思っています」（井上先生）

1年次の秋に

開催される小倉高校恒例の弁論大会も、「倉高ONLY ONE計画」に組み込まれた行事の一つ。ただ自分の伝えたいことを訴えるのではなく、それまでに調べたことを文章で表現し、それを他者にわかりやすく伝える方法を学ぶのが、その目的だ。以前は、テーマ設定は生徒の自由だったが、今は「自分の進路を考える」という方向性が与えられている。

「学年主任や担任の先生方の指導に負う部分が大きいと思うのですが、『将来の女性のあり方』『国際社会に向けて』といった、未来に向けての夢や、関心のある社会問題についてなど、進路という方向性に沿った弁論が多くなりましたね。弁論大会でほかの生徒が考えていることを知り、自分ももっと深く考えなければ、と感じた生徒もいたようです」（満江先生）

2 年次の修学旅行は、毎年ニュージーランドへ。9年度、ある班は事前に日本で見学した地熱発電所を、ニュージーランドでも見学し、レポートをまとめた。

進路指導室は、さまざまな資料やパソコンを利用しながら生徒が教師に進路について相談する部屋。ほかに、進路資料室、進路事務室、進路相談室もある。

職場訪問にしても、弁論大会にしても、ただ取り組みを行うだけでは不十分、重要なのは生徒が積極的に取り組むよう動機づけをすること、と小倉高校の教師は口をそろえる。

「生徒にやろうと思わせるために、動機づけは必要です。教師の側からほめ、声をかけて、生徒をやる気にさせなくてはなりません。どんな生徒でも、何人もの教師からほめられればやる気が起こるはず。教師みんなで生徒を育てていこうという意識を持ち、生徒をよく見て、やる気を引き出すよう心がけています」（満江先生）

そのために、教師全員でそれぞれの生徒の情報を共有する場、それが職員室であるという。

「今日の朝、Aは元気がない様子だったんですが、授業中はどんな感じでしたか」

あるクラス担任が、職員室でそう発言する。すると周りの教師から、すぐ反応が返ってくる。

「そういえば、私の授業でも、いつもと違って手を挙げて発言しませんでした」

「Aは今、部活動の野球でちょっとスランプ状態のようですよ」

小倉高校の職員室は、日ごろから自然と、生徒の情報を交換する場となっている。このような環境があるからこそ、「倉高ONLY ONE計画」を効果的に進めていくことができるのだ。

進路決定の

最終段階といえるのが、学部別講演会である。

「2年次の2学期に大学の先生を招いて行う学部別講演会までに、進路の方向が固まればいいと思います。生徒が持っている、進路についてここが知りたいという疑問に直接こたえる場が、この学部別講演会なんです」（池田先生）

生徒は2年次に進級するときコースに分かれ、継続的に大学、学部・学科などの調査を行っている。それに加え、この講演会に向けての事前研究のため、コース内で生徒が担当する学問分野を決め、調査を行う。そして、結果を小冊子にまとめ、互いに見せ合うことで事前に理解を深めていく。2年次の春にコースに分かれてからの研究の総まとめが、この講演会といえる。

そして、3年次には希望進路を実現するための小論文・面接指導へと移行していく「倉高ONLY ONE計画」。一つずつ取り組みをこなしていけば、段階的に進路について考えていけるしくみになっているのである。

生徒の成長を

感じる、と語る小倉高校の教師たち。

教師の手助けなしに、学校行事を計画し実行する生徒の姿に、取り組みの成果を実感すると話すのは、生徒会担当の松本英先生。

「入学したてのころ、文化祭で発表するために苦労していた生徒たちが、学校運営の中心となるべき学年になるころには、すべてを自分たちの手で進めていくことができるようになっている。その様子を目の当たりにすると、生徒も成長しているんだと心から実感します」

さらに、生徒の成長を目の当たりにした教師が、人間を育てるおもしろさに気づき、もっと生徒を成長させようと働きかける。そんな姿を、校内で頻繁に目にするようになったという。

例えば、文化祭でリーダーシップをとるおもしろさに気づいた生徒に、職場訪問で班長をやるよう勧めてみる。文化祭での働きをほめ、班長を引き受けてもらい、物事の進め方を一から経験させる。すると、生徒がまた成長する。こんな繰り返しが、学校のいたる所で起きている。

生徒の進路意識を高めるという流れの中で、総合的な力を持った生徒を育てていこうと始まった「倉高ONLY ONE計画」は、小倉高校全体のベクトルをさらに上向きにしたようだ。